

平成27年度 第3回 槻の木高等学校 学校協議会 記録

<開催日時>平成28年3月19日(土) 16:00~18:00

<開催場所>槻の木高校応接室

<出席者>

[委員] 木村 勝 会長、北山茂治 委員、宮坂政宏 委員

[学校] 竹下健治 校長、奥谷彰男 教頭、小梶芳忠 事務長

山本 尚 首席、田中 眞 首席、藤田 稔 教諭、奥本雅俊 教諭

1. 校長挨拶(竹下校長)

後期入試一本化となったものの、倍率が1.42倍もあった。倍率に対する感想というよりも、本校を希望する中学生がこんなにもたくさんいたという思いが強い。今年の総括をしっかりと行って今後の取り組みに活かしていきたい。

2. 会長挨拶

3. 報告・協議

<話題提供1 平成27年度 学校教育自己診断の結果をもとに分析(山本首席)>

木村会長

教職員アンケートは記名式で行っているのか?

奥谷教頭

無記名で行っている。

山本首席

生徒・保護者も無記名で行っている。

宮坂委員

学校教育自己診断と他のデータとの違いを組み合わせてみないと分析は難しい。もう少しそういう部分も教えて欲しい。

もう一つは1対1の質問だけでなくいろいろな因子に分けての分析があれば教えていただきたい。

山本首席

マークカードを読み込んで業者から数字をもらうだけなので、平たい数字は見る事ができるが…ここまで顕著な数字が出てきたのは初めてである。気をつけてみていく必要を感じる。実態については各学年の模試の結果を学習指導室長の方から報告をお願いしたい。

奥本教諭

1年生についてはテスト結果も高いが、学習時間も今までのなかで一番高い。

山本首席

1年は503人受験で280人合格、前期入試の倍率1.7倍であった。2年生は4

50人受験で280人合格、1.6倍である。厳しい入試を乗り越えて入学してきた学年といえる。昨年度までは前期入試だからという理由で急に槻の木を受験することにしたという生徒がいたようだ。入学者の15%ほど一度も学校説明会に来ていない生徒も見受けられた。生活実態も変わっていないようだ。一年生の中では物理化学に対する質問が多い。物理化学の苦手な層が多いようだ。

宮坂委員

期待値が高くなると満足度が下がる。男女をそろえたパーセンテージを見るのも何か特徴が出るかもしれない。この1年間でカリキュラムを変えたのか？

山本首席

変えていない。

宮坂委員

「授業の難易度が適切である」という項目のポイントが低いというが、簡単すぎるのか、難しいのか、その辺を分析すると何か見えてくるかもしれない。

藤田教諭

一年の物理などは難しい問題で欠点者が大量に出た。新しく本校に来られた先生は生徒が授業を静かに聞いているから理解していると勘違いしてしまう。数学は基本的に2年の内容にも入っている。授業の食いつきは少し難しいくらいのほうが良い。国公立志望が多いので数学が鍵になってくる。数学は安直な私学受験への流れをとめるためには大切である。

宮坂委員

生徒は難易度が難しいけれども、自分のためになっていると考えているのか？

藤田教諭

物理は本当にしんどいようだ。

宮坂委員

授業が学習意欲の向上には役立っていないがやらなければいけないと感じている。そのように分析できるのであれば、期待できる。

北山委員

授業についていくのはしんどいでしょうね。だが生徒指導に対するポイントはどの学年も差がないように思う。

山本首席

これまでは他校と槻の木の違いという面がおおいにあったが、現在はそれが大前提になっており入学している。

藤田教諭

今の1年生は9期生の実績をみて本校への入学を決めているのではないか。今度の入学生も10期生の実績をみて本校へ入学してくると思われる。本日午前に行われた合格者登校もしっかりしていた。

山本首席

ちゃんと自分でメモをしていた。数字が出ているので注目すべき。

木村会長

一番初めの質問項目である「他の学校にない特色がある」は96%もある。1年生だから慣れていないからか、先生とのコミュニケーションが取れていないのかも。会社でも最初つまずいてしまうと半年以内で辞めてしまう事が多い。落ちこぼれてきた子をどのようにするのが課題では。

進学以外にも教えることがあり、仕組みを作る必要性がある。個人的なパフォーマンスに頼っていたら長続きしない。親の学校への評価と子供の評価が食い違っているように感じる。クラブで頑張っている子達の1,2年生の時の成績は低いと思うが、落ちこぼれた生徒のケアはできているのですか？

山本首席

進学面や雰囲気、コミュニケーションの苦手な子が安全安心を目的に本校を選んでくる子がいる。本校を選ぶ理由が多様化している。

木村会長

年齢も近い若い先生方が生徒の気持ちも理解しやすいのではないか。文化祭や体育大会に関しても、生徒達での充実感が低いように感じる。

竹下校長

本校の生徒は自分に厳しい。自己肯定感が低いように感じる。また、期待値との関係もあるように思う。

宮坂委員

学校は努力を認めてくれるし、学習の評価も納得できている。質問もしやすいようであり、丁寧に教えてもらっていると感しながら先生は生徒の意見を聞いてくれていないと思っている。このギャップはなんだろう？

山本首席

理想的な姿というものが分かっていないのでは。

宮坂委員

生徒との必要な距離感を取っていれば、低くても構わない。

山本首席

学校全体としての背骨の部分は変わっていない。数字について考えていかないと次の一年がどうなっていくのか。

宮坂委員

「週末課題や週間課題が学習の定着に役立っている」や「土曜講習が学力向上に役立つと思う」というのが内容とギャップがあるのか？「自宅で学習する習慣ができている」のポイントが低いのは、校長先生が言うとおりに自己肯定感が低いのが原因か。また、先生方のアンケート結果でも読書指導のポイントが低い。読書指導をしていかななくては。大学でも読解力などの言語活動の能力を高めることが大切になっている。読書をさまざまな手法で広く捉えて高めていく必要がある。

木村会長

教職員の「教職員の意見が反映されている」という項目のポイントが低い。先生の意見を出すところはオープンになっているのか？少し低いように思う。風通しが悪いと言う事では？

宮坂委員

教職員の「教職員の意見が反映されている」・「職員会議が意思疎通や意見交換の場として有効に機能している」のポイントが低い。対照的なのは「教職員の適性に応じた分掌の配置」や「会議の内容が教育活動や学校運営に活かされている」・「教職員間の相互理解がなされ、信頼関係に基づいて教育活動が行われている」が高い。これはどう見ればいいのか？ある面良い教員集団だと伺える。

山本首席

ミッション司令塔がいて仕事を忠実に行う。結果、教育で責任あるところで決められている。

北山委員

アンケートから校長先生のリーダーシップが非常に発揮されている。校長先生の仰るとおり、先生方に動いてもらう。

竹下校長

学校の文化の問題。職員会議なども他の学校から来られた先生方は、このような職員会議ができるのかと思われる。

宮坂委員

生徒・保護者のアンケートの「施設設備について」のポイントが低い。成果と実績をあげている学校なのに対応をしてくれないのはおかしい。

木村会長

大阪府は教育にお金をもう少し使って欲しい。

竹下校長

建て替えまではなかなか難しく、やってももらったとしても修繕までである。

木村会長

この校舎は何年に建てられたのですか？

山本首席

昭和37年です。

宮坂委員

「施設設備の修理や取替え」のポイントも低い。

山本首席

いざというときに使えない施設があり困っている。

宮坂委員

学校協議会の総意として何とかして欲しいと府に要望してほしい。

木村会長

優秀な人材が海外へ流出しないようにお金をかけるべきところにしっかりとお金をかけて欲しい。

<話題提供2 平成27年度 槻の木の教科教育向上への模索（山本首席）>

- 現在の教科の取り組み
 - ☆ 考査の統一問題
 - ☆ 進度の調整
 - ☆ 教科会議の確保 ⇒ 更なる時間確保へ
 - ☆ 年間二回の研究授業と討議
 - △ 全教科のCan Doリスト
 - △ 授業アンケート討議
 - 新シラバスなど
- 新たな取り組みの模索
- 「槻の木」の強みを活かした取り組み
- 課題・問題点

木村会長

アクティブラーニングをやりなさいというのを、教育委員会が言ってくるのですか？

宮坂委員

教育委員会というよりは、文科省はポジティブに学ぶよりもアクティブに、という考えだ。いわゆる主体的・協同的に学習したほうが学力が高くなるということがデータの言われている。だからアクティブラーニングのほうが良いと。だからパッシブよりはアクティブのほうが良いと。注入主義的な教育よりは子供もアクティブに授業に参加してやったほうが良いと。ただし山本首席の言うとおり、パッシブなように見えても例えば黒板とチョークと話だけで生徒に一切質問などせずに子供はそれだけ見て聞いているだけでも頭の中で考えて学力が高みに達している場合もある。授業の形態だけでアクティブラーニングというわけではない。今は形態だけが言われている。

木村会長

目的は生徒にもインプットだけでなくアウトプットもさせなさいということなのか？

山本首席

それもあります。だけどそれは普通の授業でもやっている。発表会をやりなさいという形式にとらわれてしまう。と勘違いしてしまう。

北山委員

全国学力テストの結果、思考力判断力といったものが世界と比較すると日本は弱いと言われている。そういうものを伸ばそうとすると、能動的な授業形態をとると、それらの力をつけやすく、この形態が必要だということです。

宮坂委員

形にとられるようなアクティブラーニングなら、むしろやらない方が良い。弊害になっている。学力の要素というのは色々あるから、何がその学力の要素を高めていくのかそれに専心されたいのでは？形式はどのような形でもいいし、得手不得手もあるでしょうから。本校はそれを実践することで今までやっているのだから、それでいいと思う。おそらく文科省はこのアクティブラーニングと言葉を撤回してくるように思う。今混乱

しているので…

木村会長

国民性もある。欧米の人は平気でできるかもしれないが、形だけ合わせるといのは違うと思う。出来るだけ先生は授業で生徒にアウトプットさせるように問いかけて話しさせる事を意識するだけでも徐々に慣れてくるのでは。大学に行けば研究室に入るとまさしくアクティブにやっていかないといけない。社会人になるにつれて慣れていくので無理に高校で形にこだわるのはどうか。パフォーマンスでやったとしても生徒が理解していないし、授業の進度が進んでいない方が問題である。そこは加減していかないと仕方がない。

山本首席

班で相談して話し合っ、それだけでは何を求めているのか分からない。

北山委員

義務教育下のさまざまな学力層が集まったところでは有効な手段。グループ学習だけではなくいろいろな形態のアクティブラーニングが必要である。もちろん、従来の教師主導による授業形態も必要である。

木村会長

前回も同じ話が出たと思うが、若い先生がベテランの先生の授業をちゃんと見ていますか？コミュニケーションを取れる形になっているのか？教職員別にチーム分けした職員室になっているが、物理的に職員室内の席替えをしてという解決には行かないのか？府で職員室の形態まで決められているのか？

山本首席

そういうことではない。職員室の作りは各校によって違う。

木村会長

同じ教科の先生方がコミュニケーションをとりやすいように近い座席に固まって座るとかしないと、ちょっとした授業の質問も教員間でしにくいのでは？出来るだけ相談や経験を聞き易い環境にしていかないと、若い先生は本校の生徒は何も言わないので一方的な授業をするだけで「生徒は理解している」勘違いしてしまう。

山本首席

それは多いように感じる。

木村会長

物理的に職員室の座席をベテランの先生と若手の先生の座席を教科で近くにすることもだけでも変わるのではないかと思う。

山本首席

今は分掌のグループごとに別れて座ってもらっているが、その中では教科の先生は近づいて座ってもらうようにしている。生徒と一緒に教員も席によって成長を促されることがある。席というのはとても大切である。それが良いようになるかは難しいところである。

木村会長

会社でも、能力や結果が伸びていないので指導をするように言うことができるのは、

上下関係があるから出来る。先生方はベテラン・若手と横並びで、同僚として指導しにくいのでは？

竹下校長

ある程度は先輩後輩として出来るが……

木村会長

良くあるのはベテランが若手を指導するのを面倒くさがる。若手が伸びない原因である。ベテランは「仕事が忙しい」など上手に言い訳するが、若い人を育てることに損得勘定を感じていることがある。私たちの世代はそんなに手取り足取り教えられたことがなかったので「何でこんなに教えないと分からないのか」と思っている。学校でもそう感じている先生がいるのでは？学校を良くするために管理職の先生方がベテランの先生方に指導をお願いしたい。席を近づけたからといって教えない人は教えない。教える人は座席の位置関係なしに教えると思うが、「教えなければいけない」というチーム全体の責任を持たせるようにして欲しい。

竹下校長

本校は室単位で職員室の座席を決めているが、それが教員の基盤となるような指導が出来る。その一方で教科の専門性に関して教科会議の時間をさらに確保して、その教科会議は若手の研修の場にして欲しいと言わしてもらっている。それと併せてシラバスを充実させる。年6回ある考査の後に教科会議を設定し、そこでシラバスを考えてもらっているのは、そこで振り返りを行う。まさに若手教員の研修の場である。ベテランの先生にお願いしており、教科の方はシラバス作りを研修の場に行っている。基盤になるところでいくら専門性があると雖も若い先生には基盤となる文章力を教える必要がある。今の形のほうが基本的に良いのではないかと思う。

宮坂委員

先生の質を高めるために何が必要なのか？ということである。再整理をした方がいいと思ったのは、教員としての専門性、教え方・教える技術・表現力、生徒の実態に合わせるといったもの。例えば教え方、内容がその生徒にあっていのかどうか？授業が簡単すぎて生徒にあわなかったり、難しすぎて合わなかったりする場合もあるので、生徒の実態にあっていのかということが大切。そういう意味では生徒に入ってもらった研究授業を行い、生徒に評価してもらおうというのは良いのでは？専門性の部分は専門性の部分で、日ごろから意識してOJTであるのならばOJTを活用して実施していくのがよい。山本先生が考えておられるのはアクションリサーチの手法に良く似ている。この方法も何年も前から教育センターでも様々な学校でも言っているのだが、なかなか取り入れてもらえない。実践する方にも力量が問われるがアクションリサーチという手法を取り入れて欲しい。その部分を整理していただいたら良いのでは？

アクティブラーニングはあくまでも手法なので、目的は何なのか？目的に対する手段だということ、いろんな手段があり、そのなかのひとつの手段である。教材、テスト、オリジナルの授業もそうであろうし、その中の一つがアクティブラーニングである。生徒の学力、生きる力といった総合的なものを高めるのが学校であり、何も一つの手法にとられる事はない。

山本首席

我々30年間教師を経験して来たものを、ぜんぜん違うところから授業を評価するというのはどうか。これから教師になる人にとって「これをまず勉強させるのか？」順番が違うと思う。5番目か6番目位だろうと思う。まずちゃんと規律礼をさせるとか、話を聞かせるとか。

宮坂委員

そうですね。総体的にやらなければいけない事がある訳で、全部含めて授業で、手法がいろいろある中の一つだと思っていただいて、それが必要な場合はそれを使うというのが良い。

木村会長

進学校でアクティブラーニングをやっているところはあるのですか？

竹下校長

どちらかと言えば一斉授業をやっている。教え込まないといけないし、グループワークであれば時間は不足する。

宮坂委員

私学の進学校の例を挙げると、授業の中で教えているのではない。授業をずっと見させて貰ったら、授業は確認の場であって、自宅で勉強したり、たくさん出された課題をしたり、授業は確認の場である。偏った反転学習かなとも思うが、そうでないとやっていけない。授業だけで力をつけていたら時間がいくらあっても足りず、やっていけない。

山本首席

授業アンケートであっても「分かりやすかったら良し」とするような生徒ではなくなってきた。分かりやすいのが簡単すぎる、知的好奇心がくすぐられないといった、そうではなくて「少し分からないから考えよう」位の授業をして欲しいという少しレベルの高い要求層を持った生徒が少し出てきているように思う。そうだとすれば先生はぜんぜん追いついていない。

宮坂委員

それをアクティブラーニングで解消しようとしたら大間違い。まず生徒の実態をきちんと把握したうえでどういう授業を作っていくのか。教材を作っていくのか。どういう計画を作っていくのか。その辺りのことを考えていかななくてはいけない。そういう時期に来ているのかも知れない。

山本首席

全部距離をつめて丁寧にするというよりは、冷たく突き放すのが上手な人のほうが良いのかと思う。

宮坂委員

指導法としてはそれで最適ですから。子供も自分が家でやっている事を先生にそう言われたら良いと思うのではないか。生徒はすごいです。一日一日ととても伸びていく。そういうふうに後押ししてあげる時期になってきている。

藤田教諭

教えすぎるのはダメなのかと思う。授業も聞いていない子供たちがテスト前に職員室

へ来てもう一度、授業を一からやっているような教員もいますし、それに関しては、気心知れている教員には「止めたほうが良い」と言えるが、その教員にとっては「生徒が来てくれているというのが嬉しい」「分かったと言われて嬉しい」と感じる。

宮坂委員

試験前だけやっても学力つかないでしょう。

藤田教諭

そうです。学力がつかないので「普段授業でやっているからテスト前日だけ聞きに来てダメだ」と言わないといけないのだけれどなかなか言えない。まだ「生徒が来てくれているというのが嬉しい」という若い年齢なんではしょうか？会社ではどうか分かりませんが、私たちベテランと言われる先生が若い先生に聞きに来られて答えないということはありえない。大体丁寧に教えます。ベテランから見たら若い先生がそういう質問に来るといことで「信頼しているのだな」と思うしアドバイスしてあげられる。そうでない限り上下関係もない同僚にはアドバイスしにくい。明らかに見ていたら「アドバイスしてあげないと」と思うような先生もいるがなかなか難しい。私たちが若い時を考えると、職員室の席が離れていようとも、自分が良いなと思う先生は聞きに行っていたし、見に行っていたと思う。「どのように生徒に対応するのか」など。明らかに若い世代とは違う…

木村会長

社会の熾烈な競争にさらされた年代とは違う。

宮坂委員

確かに高みを目指していくというのがないのかも知れませんが、これでいいのかという部分があるように見受けられる。

藤田教諭

すごいビジネスライクだったり、もうちょっと生徒に行ってほしいというような事もある。仕事と捉えているのかなと思う様なことがある。今、50代がだんだんいなくなる。40代の層が薄い。それで今の2～30代の人を見ていたら、不安を感じるようなことがある。大阪を見ていると。

山本首席

若い先生が困っていない。どうしようというようなところまでいっていない。

藤田教諭

榎の木では困らないです。それで変な自信をつけていく。たぶん今のままで他校に行けば大変なことになる。

北山委員

中学校でもそう。若い先生の育て方は難しい。

木村会長

藤田先生が言われた、そういう部分を教えてあげて欲しい。勘違いしているでであるとか、優しさを間違っているとか…

竹下校長

若い先生には「ちゃんと生徒の顔見ているか」と言っている。やっぱりベテランの先

生とは違う。ベテランの先生は結構生徒を揺さぶりますので生徒も目が輝く。一方目が輝いていなくても黙ってこっちを向いているのが聞いているものだと若い先生は思ってしまう。ぜんぜん違うのですが、生徒が聞いていないというのが分からない。そこまで人を深く見られていないからかも知れない。顔を見たら分かるのですが…

北山委員

生徒が寝たり、出て行ったりしたらわかるのだが。一生懸命理解しようと聞いているのだと思います。実際のところ理解できていない生徒もいるのでしょう。

藤田教諭

あと感じるころは、若い先生が困っていたらベテランの先生がものすごく手を差し伸べる。若い先生が可愛いのでしょうか。半分やってあげることも。そこまでするのかと思うこともあり、もっと失敗したらいいと思う。

宮坂委員

あまり手を貸しすぎると伸びないです。

木村会長

時代なのかと思ってしまう。若い人になかなか通じない。困っていないからだと思う。生活をかけて学校に通うようなことはなく、緩い日本のなかで危機感がない。授業一回に人生を賭けたら必死で噛り付いて聞くようになるはず。そういうような緊張感がないのだと思う。生徒も先生も平和に生きてきているので分からないと思う。会社では何故頑張る必要があるのか、ゆっくりと教えていく。皆集めて言うより、ひとりひとり呼んでじっくりやっている。

北山委員

どこまで優しく係っていくか、線引きと言うか加減が難しい。何もしないとコミュニケーションを取るのが下手で孤立して人もいる。

木村会長

厳しい時代と優しい時代がどうしても交互に来るので、今の若い先生の次の世代は厳しい先生が増えるのでしょうか。

山本首席

ミドル世代手前のボリュームゾーンが学校の教育力を支えるはずだが、そこら辺が危うくなり、50代がずっと最前線で指導から全部やらなければいけなくなるとバランスが崩れて難しくなる。生徒の要求レベルが上がると余計に難しくなる。

宮坂委員

生徒からどういう要求が出ているのか、生徒の要求を感じ取って、それを自分の授業に活かして教えるのが良い先生。そうじゃなく教師がこうやって授業を設計したから設計どおりに教えておいたらいいであろうと…まあまあ生徒も勉強できるし…おそらくそういう状況でしょう。研究があって、例えばベテランの先生が一人の子供を見ても教える内容だけじゃなくて、そこから派生するいろいろな課題をきちんと考えたうえで授業をする。一つの授業の中で教師の頭の中に去来するものがたくさんあって、そういう部分があるのと、ひとつの教科書に沿って生徒が理解したらそれで良いというだけで教

えているだけではぜんぜん違う。生徒と自分との間で先生自身が頭の中をフル活用して戦うような授業、マニュアルのように教えたら良いという授業とはまったく違う。そうなるためには子供からの要求を出さないと分からないのであれば、出してもらったら良い。頭を打たなければ分からないのだったら、頭を打たしてあげたら良い。

山本首席

生徒に言ってもらうのが一番良い。槻の木の子に「先生ダメ」と言われたらショックでしょうね…

宮坂委員

進学校をご経験の先生や、ご出身の先生もいらっしゃると思うが、例えばある教科の先生が「君たちは僕を超えなければいけない」と言う。教科の力で「僕を越えなかったら〇〇大学に行けないよ」と言ったりする。逆に言えば超えるような子を自分は教えている。授業でそれだけのことを自分自身は授業で力量を発揮してやらないといけない。「超えなきゃいけない」と言いながら、先生たちは生徒たちより力量が上ですから、そういう部分があるのかどうかということです。

山本首席

他府県の高校を視察した時によく言われるのは、自分が東大じゃないのに東大に行く子を教えているというのは実は凄いことで、そこにこそモチベーションがあって、「相当俺はやらなければいけない」となる訳です。それはどの学校でも常に自分より学力が上回っている生徒というのはたくさんいて、たまたまある教科の学力が違うことであって、凄い奴を教えているかもしれないと根本的なところの理屈が教師にないと、生徒をリスペクトしないと教師は育たないし、常に上から目線の力量であれば教師は教師でなくなってくる。たぶん槻の木の子供たちは私たちが思っている以上に違うレベルで授業の把握や評価をしっかりとしているかもしれない。教師の判定を鋭いところをついてくるかもしれないし、その可能性は十分にある。そういうものが若手と一緒に共有できたら価値観が変わってくるかもしれない。先生よりも生徒に言ってもらったほうが分かりやすいと思う。

北山委員

中学校の授業研究の指導助言講師として、元横浜国立大の高木展郎先生を招き、その先生の指導のもと、中学校でも生徒を入れて研究協議をやっているとのこと。冠中学校だったと思いますが、しっかりとした生徒ですから結構良い意見が出る。

宮坂委員

生徒は言ってくれと。言ってくれないからとそれに甘えてしまっただけはダメということです。本当は表現力がないだけで色んなことを言ってくれているのでは。教員と言うのはそれを受け止めなくてははいけない。

<話題提供3 「後輩たちへのメッセージ」報告（田中眞首席）>

宮坂委員

良いですよ。

奥谷教頭

想像以上に良かったです。

木村会長

生徒が将来を見るときに指針というか何かおぼろげに見える、先輩がこのようななったとか、生徒もちょっと勇気が出たりとか非常に良いと思います。年配の人の話を聞くより身近な先輩の話が良いですね。

<まとめ>

北山委員

この協議会に参加させていただき、私自身、いろいろ勉強させていただくことが出来た。満足のいく生徒たちをどの高校さんにも進学させたい。本当にこの会で話を聞くことが参考になりました。受験制度・評価の方法も変わって、難しい時代になってきましたが、槻の木高校さんには勉強を頑張りたいという生徒を送っていきたい。今後ともよろしく願いいたします。ありがとうございました。

木村会長

今年度としてはこれが最後になりますが、一年間ありがとうございました。引き続き来年度もまた私が会長をやらせていただくこととなります。よろしく願いいたします。先生方と協議会だけではなく、いろいろな催しで話をさせていただく機会があり非常に良かったと思う。槻の木高校だけではなく今の若い世代はインターネットの普及により情報量が多すぎます。何でもかんでも見えてしまうのがいいのか悪いのか、商売上使う面もあるが、良くないと思う。変化も激しく難しい時代であるが、最終的に地に足をつけて他人と比較するのではなく自分の納得のいく人生を歩んでいって欲しいと思います。大人になっていく入り口の大切な世代に、槻の木高校では勉強以外のそういうようなところも教えてもらえるよう、先生方にはいつもお願いしているところですが、そこにプラスして、学力もアップしていけば尚良いと思っています。

宮坂委員

2つのことを申し上げたい。1つは公教育のあり方。今は転換期にあるが、官僚国家で官僚的な支配で公教育が運営されてきた時代から、評価国家要するに学校に一定の自律性や特権を与えてアウトプットの部分で評価してコントロールしていくという時代になりつつある。これからはもっと競争原理を加味した評価を導入して学校をコントロールしていく傾向が強くなる。表面的には自由自律的に学校経営計画などを自分で作っていきなさいと言いつつ、アウトプットでコントロールしていく時代がますます強くなる。もう1つは学校の自律性という時代のなかで政策を提供する側は評価で学校をコントロールしようとするがアウトプットを出すのは学校なのだから、アウトプットを出すための教育を学校が作っていけば良い。学校が作るという事は学校の先生というのはクライアント（目の前の子供）の変化を見ている。何を欲しているのかに対応して公教育が政策で成り立っているとするならば、政策を作っていくことが出来る。先生が自律的に政策を造ってアウトプットしていくことも可能な時代になってきている。ただ

大阪府のなかでそれが出来ている学校がいくつあるのか？槻の木高校はそれが出来る可能性のある学校である。時代のパブリックマネジメントが変化してきているなかで学校がどうして行くのかという事は一つの流れである。もう一つは教員の専門性は今ほど問われている時ではない。こんな事言ったら怒られますが、今まででしたら教科書・指導書や受験に役立つような参考書がある程度教えていたら役に立つ授業は結構あったと思う。しかし、これからは子供発でやっていかないと学力の高みには達していけない。子供も変わってきているので先生方の専門性はアクティブラーニングというよりアクションリサーチとしての専門性を高めて欲しい。これら2つは是非とも課題としてやって欲しい。